

更級への旅

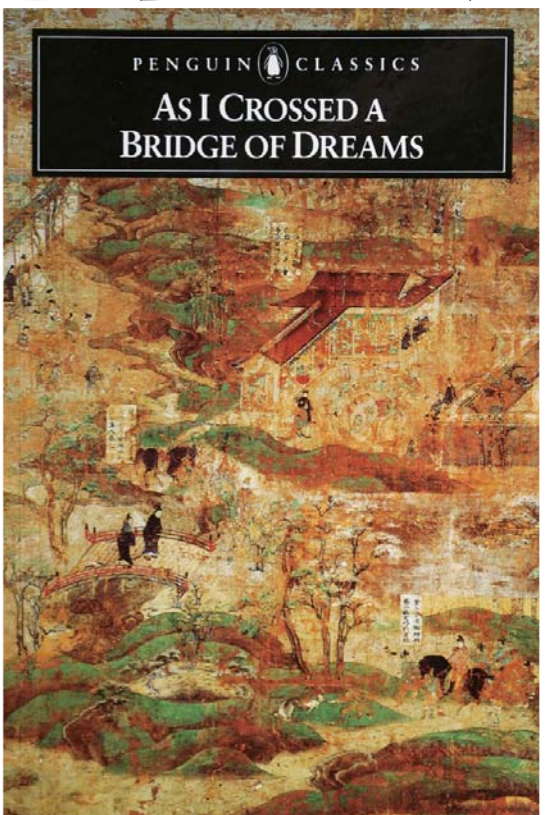
144

「フェスティバル・ジャポン」

世界初演の「更級日記」

仏紙も絶賛、静止の美

フランスではオペラ上演



日仏修好通商条約締結から150

年の今年、フランス各地で日本

関連の文化行事が催されている。

フランス第2の都市リヨンの国

立オペラ座でも4月16日、日本の

文学に触発されたオペラ4作品や

演奏会を組んだ「フェスティバル

・ジャポン」が開かれた。

いつもはローラースケートの若

者たちでにぎわう劇場正面の玄関

脇に、小さな竹やぶと石庭が配さ

れ、漫画風イラストの公演ポスタ

ーが壁面を飾る。

注目されたのは、世界初演の

「更級日記」。現代を代表する

ハンガリーの作曲家ペーター・

エトベシュと舞踏集団「山海塾」

の演出家・天児牛大とのコラボレ

ーションは、10年前に同オペラ座

で初演された「三人姉妹」以来

だ。

白く光る床に、月をイメージし

た銀色の輪二つが宙に浮かぶ。歌

手たちは歌舞伎さながらの衣装の

早替で場面展開に一役買い、手

の振りで蜻蛉の羽ばたきや文を書

く所作を見せた。

音楽学校の仲間と見に来た女子

高生(16)は「現代音楽の無機質な

響きが、淡々とした舞台の流れと

不思議に溶け合っていた」。

フィガロ紙も「静止の美」の見

出しで「西欧におけるドラマと全

く別の時間軸。デリケートな声の

抑揚によって、驚くほど感情移入

できた」と高く評価した。

オペラ座のセルジュ・ドルニ総

監督は「既成観念を払拭する日本

発見につながった」という。

どの作品も沈黙や余韻、間の扱い

に創意がみられ、人物の情念を際

立たせることで普遍的な世界観を

描いていた。

能「隅田川」に想を得たブリテ

ン作曲「カーリユー・リバー」

(オリビエ・ピ演出)、アンヌテ

レサ・ドウ・ケースマイケル振り

付けで細川俊夫作曲のオペラ「斑

女」(三島由紀夫原作)を含めた

全公演が、90%を超す入りを記録

した。

(斎藤珠里・在パリ評論家)



リヨン国立オペラ座公演「更級日記」から©Bertrand Stofleth

三年前の二〇〇八年三月のことになりますが朝日新聞で、平安時代の古典「更級日記」がフランスでオペラとして上演されたという記事を見つけた(上の写真)。「世界初演の『更級日記』 仏紙も絶賛 静止の美」の見出しで文化面に載っていました。

「更級日記」とその作者については、シリーズで幾度となく紹介してきました(1、16、31、40、41、47、59、60、66、67、68、69、70、71、73などの各号)。「さらしな」という地域が古代から都の人たちのあこがれの地であったことを裏付ける日記です。それだけにフランスで上演しかも絶賛されたとなれば、実際の公演を見てみたいものです。この記事を読む限り、かなり原作を抽象化し、月を強調した作品のようです。また、並行して調べる中で分かったのは、このオペラもそうですが、「更級日記」は海外では「Lady Sarashina」というタイトルで知られているという点です。

この日記を書いたのは「菅原孝標女」。学問の神様で知られる菅原道真の子孫である菅原孝標という貴族の娘(女)です。ですから日記の主人公は「Sugawara notakasuenomusume」と書くべきものですが、それでは分かりづらいので、「Lady Sarashina」という言葉には、独特な意味合いがあると思います。米国に「レディー・ガガ」という人気女性歌手がいますが、この女性は奇抜な衣装と派手なパフォーマンスながら、東日本大震災ではいち早く日本支援を言動で示すなど、実は硬派なアーティストとして注目されました。交通事故で不慮の死を遂げた英国の元皇太子妃ダイアナさんも「レディー・ダイアナ」と呼ばれることがあります。「レディー」という言葉には個性や自尊心を持った女性への称号でもあるようです。ですから、「Lady Sarashina」は日本語にすると、「淑女更級」「品位のある更級という女性」という感じですね。

英語の訳本や訳文にも目を通してみました。それらに一貫していると感じるのは、自らが望む人生は送れずとも生を全うしようとした菅原孝標女への共感です。訳出には訳者の解釈が加わるので、結果として、個性がより尊重される海外の人の訳文には個性が強い女性として描かれるのかもしれない。結果的に海外で「さらしな(Sarashina)」という言葉は、精神的に自立した女性を意味する言葉として広まっている可能性があるかもしれない。

右の写真はペンギンクラシックス刊の「更級日記」英訳本の表紙です。タイトルは「AS I CROSSED A BRIDGE OF DREAMS」。菅原孝標女が晩年、阿弥陀如来の夢を見ることになって老いや死の安寧を得られたことをモチーフに三途の川も想起させるタイトルと表紙デザインですが、本文の中では「Lady Sarashina」として紹介されています。左の写真はオペラが上演されたリヨンのオペラハウスのホームページで紹介されていた写真の一枚です。右上部の細い白線は月だと思えます。記事中で紹介された「静止の美」という言葉を聞くと、能の幽玄美と重なります。「太陽の季節」から「月の季節」への移行を象徴する一場面でもあるのかなと思いました。



発行二〇一一年九月二十五日
編集さらしな堂
(代表・大谷善邦)
〒三三九・〇八二三
長野県千曲市大字若宮一八四・六
(旧更級郡更級村)